

カルチャー・ショック

外国人のみた日本



Kim Hyeon Soo
出身地：韓国・慶南
所属：企画予算省
日本滞在：2006年11月～

築地市場の「赤い手」

金 鉉樹

赴任後すぐに中央区月島に家を見つけたことができたが、家内と娘が来日するまでの一カ月余りは一人で暮らすことになった。海外出張のときのように、私は早起きし、運動も兼ねて自分の家の周辺環境を確かめるべく観察を始めた。私は家の周辺を理解することがその地域をよりよく理解し、ひいてはその国の生活文化に一步近付くための秘訣だという考えを持っている。一週間位の間そのようにして家の周辺を歩き回っていたが、中には少し遠くへ行くことにした。道に迷うことが心配でいつも地図を持参して行った。勝鬨橋を渡って周辺を見回しているうちに築地市場が目に入った。築地市場にはマグロを含めて生きの良い活魚や貝などがいろいろと陳列されていた。韓国でよく見る魚もあったし、初めて見る赤い色の名前も分からない魚もあった。市場への関心もあって、次の日の早朝に再び行ってみたが、何と言っても珍しかったのは、市場内で品物を運ぶ車であった。ドラム缶をひっくり返したようなエンジンを持った構内車は、その音も騒々しく、人々はそれを聞いてびびくりと飛び退くようだった。市場の中で魚を売る人々のほとんどが男性であることにも驚いた。女性たちはウサギ小屋のような小さなボックスの中

で計算作業をしていた。

一番珍しく驚くべき点は、冬の寒い日に誰一人としてゴム手袋や軍手さえ着けずに氷に入れた魚を素手で扱っているという事実だった。韓国ではほとんどすべての商人たちがゴム手袋をはめて魚を扱う。魚だけでなく、韓国では食べ物を売る商人たちも大部分は手袋をはめて商売する。手袋をはめないで素手で魚を扱う築地の商人たちの態度は非常に印象深く、また誠意ある態度に見えた。それでも韓国的感覚が抜けない私は「この寒い冬に氷の中にある魚を扱いながらなぜ手袋をはめないのか」と思う疑問を持ちながら家に帰った。

数日後、「イトーヨーカドー」という大きなスーパーに行ったが、そこでは男性従業員が「アジ」を選別する際に、冷たさのために手が真っ赤になっているにもかかわらず手袋を使わずに素手で作業をしていた。「ああ、この人たちは手袋を使えないことになってるんだ」と考えた。

一カ月ほどたった頃、ある日本人女性と食事をする席があった。さまざまな話をした後で、「築地市場で商人たちが手袋をはめないで働く姿は韓国とは本当に違うという感じを受けた。日本はそうすることになっているようだ」と言ったら女性は

「食べものを扱う人が手袋をはめていたら気持ち悪くないか」と言うではないか。「法律で決められたことではないが、客が嫌がるならしない。それもすべての人が手袋をはめない」。これは日本だから可能なことではないかという気がした。「お客様は神様」という考えが徹底し、そのため客に親切にするというところが日本ではないか。手がかじかむだろうに、彼らはどうして手袋をはめて働きたいとは思わないのか。それでも、客が嫌がるなら、サービスとはいえその意向に従うという考えは、彼らの徹底した匠の精神とも一脈相通するのではないかという気がした。

まだまだ日本については分からないことが多い。韓国で他人が言うことを聞きかじった程度のことしか知らない。自宅周辺の地理を覚えようと歩き回って見つけた築地市場。そこで見た商人たちのかじかんた「赤い手」は、今後私が日本社会を理解し、体感するための「羅針盤」の役目をするだろう。私は今後も自らの足で歩いて直接体験しながら、心の底から日本文化を感じてみたい。築地市場の商人たちの「赤い手」は本当に彼らの徹底したサービス精神と匠の精神を教えてくれる新鮮な衝撃だった。

(海外客員研究員/訳 奥田聡)